

9) 胎児性軟骨異栄養症の骨盤並びに腰仙椎のレ線所見

千大小児科

榊原秀三, 太田 裕, 安藤建治

長島金吾, 猪野 実

従来, 胎児性軟骨異栄養症の診断は専ら四肢長管骨のレ線上の変化に依っていた。John Caffey は本症の骨盤及び腰仙椎の特異性に注目した。我々も本症患者 17 例について, 経過的にレ線検査を施行し次の所見を認めた。

1. 骨盤の変化。特に腸骨の縮少が著しい。腸骨全体としては上下に不規則な角を有する正方形に近くなっている。大坐骨切痕が狭くなっている。臼臼角は小さく, 時に負となる。Y 軟骨域は幼若乳児では増大しているが年齢が進むと正常に近づく。

2. 脊椎の変化。椎体よりも椎間が正常児より広くなっている。椎体は特に腰椎で変形がみられ前方に楔形を呈するものが多い。仙椎と尾椎は第 2 仙椎を中心にして横軸回転をなしこのため本症の臀部は後方に突出する。

Interpedicular space は第 1 腰椎から第 5 腰椎にかけて先細りとなつている。

以上の所見は本症と類似の疾患ではみられず本症の鑑別診断上の一助となりうる。

10) 小児における Iliac Index の計測応用

千大小児科

牧野忠夫, 中島元徳, 湯本 譲

安保隆文, 岡沢静夫

Caffey の方法にならい, iliac index を正常児 49 例, 蒙古症 5 例, 胎児性軟骨異栄養症 17 例, 先股脱 9 例, その他計 109 例で計測し, 次の診断的価値ある事を知った。(1) 正常児の iliac index は 1 月より 1 才まで 72.5 ± 7.3 , 1 才より 2 才まで 75.2 ± 6.8 で, Caffey による 3 月より 1 才まで 79 ± 9.8 よりやや低値である。(2) 蒙古症では, Acetabular angle 10.8 , iliac angle 37.1 , iliac index 47.8 で共に正常より低く, Caffey の値各々 11 ± 4.2 , 41 ± 7.0 , 50 ± 9.6 と大差ない。(3) 胎児性軟骨異栄養症の骨盤レ線像は極めて特異なる像を示し, acetabular angle は零に近いが, 又は負の値を示し, iliac angle は高い。(4) 先股脱は acetabular angle は分散が広く平均は少々高いが, iliac index は略正常である。

11) Turner 氏症候群を伴える男性仮性半陰陽の 1 例

千大泌尿器科

片山 喬, 水野春江

田村欣一, 林 和一郎

16 才の男性仮性半陰陽の 1 例を紹介した。本患者は Turner 氏症候群にみられる諸徴候, 整形外科的には外反肘, 内翻足, 脊椎側彎, 軟骨發育不全, Klippel-Feil syndrome 等の諸症候を有する。

又本例の性腺は右側未發育の睾丸, 右側は gonadal dysgenesis の徴を呈し, genital duct は右側精管, 左側卵管で, 之は Jost 現象の片側例と考えられる極めて興味ある現象である。

12) 勝浦市における乳幼児検診, 特に股関節間接撮影によるレ線検査の報告

勝浦整形外科 岩瀬康信

昭和 36 年 10 月, 勝浦市に於て実施された検診の結果, 生後 3 カ月から 1 年 6 カ月迄の全乳幼児 571 名中, 撮影し得た 496 名 (受診率 86.8%) のなかから, 先天股脱 9 名, 脱臼準備状態と考えられるもの 7 名, 更に再度の精密検査の必要と思われるもの 26 名を発見した。而しこれらの乳児は, 殆んど例が家人も気付かなかつたもので, 斯る一斉検診の重要な事を痛感した。先天股脱の治療の理想は, 早期発見, 早期治療の開始にある事は勿論であるが, 乳児にその発見の機会を与えるべく, 益々集団検診の強化を図らねば, ならないと思う。

12) 興味ある脊椎変形を伴った蝶形椎の 1 例

国立療養所下志津病院整形外科

渡辺英詩, 志村公男

レ線所見で第 9 胸椎に蝶形椎が認められ, 第 12 胸椎はレ線前後像で肋骨欠損せる楔状椎様の変形を, 側面像で椎体欠損の形を示し, 此の奇型椎のために比較的稀と云われる先天性後彎, 側彎を示した 12 才の 1 少女の 1 症例を報告し, その発生, レ線所見に就て 2, 3 の考按を加えた。

14) 頸椎々間板ヘルニア前方直達椎体固定術について

千大整形外科 斎藤 篤

頸椎前方直達術は 1877 年 Chiene に依り開拓され Burchhardt, H. May に依り Antero-lateral Route が発表された。椎間板ヘルニアに対する手